様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７００３０

研究課題名（和文）容姿を原因に拒絶されることへの過敏性と身体醜形懸念の関連についての生涯発達的検討

研究課題名（英文）Association between appearance-based rejection sensitivity and body dysmorphic concern across the life-span.

研究代表者
田中　勝則（Tanaka, Masanori）

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：１０５１０９６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、容姿に起因する拒絶過敏性を測定する短縮版Appearance-based Rejection Sensitivityの日本語版（J-ARS scale）を作成し、容姿に起因する拒絶過敏性と身体醜形懸念の関連を検討した。その結果、J-ARS scaleは十分な信頼性および妥当性を有することが確認された。また、関連要因を統制した上でも、容姿に起因する拒絶過敏性は身体醜形懸念を有意に予測することが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to develop the Japanese short version of Appearance-based Rejection Sensitivity scale (J-ARS scale). Additionally, I tried to examine the relationship between appearance-based rejection sensitivity and body dysmorphic concern. It was confirmed that the J-ARS scale had good reliability and validity. Furthermore, the results showed that appearance-based rejection sensitivity predicted body dysmorphic concern significantly controlling for other related factors.

研究分野：臨床心理学

キーワード：容姿に起因する拒絶過敏性　身体醜形懸念　抑うつ　やせ願望　過食　身体不満足感　他者からの評価への恐れ　強迫

１．研究開始当初の背景

身体醜形懸念 (Body Dysmorphic Concern; BDC) とは、“自分の姿が醜いのではないか”という自己の容姿の些細な（もしくは想像上の） 欠点に対する不合理で過剰な心配や、容姿への否定的認知に伴う精神的苦痛、およびこうした心配や苦痛から生じる様々な問題行動により社会的、職業的な機能不全が生じることで特徴づけられ（Littleton et al., 2005）、青年期に高まることが報告者のこれまでの研究でも明らかとなっている (Tanaka et al., 2012)。

報告者はこれまでに BDC の関連要因として個人内要因に着目して検討を進めており、高 BDC 群において高い他者からの否定的評価への恐れが認められることを確認している（田中・田山, 2013）。他者からの否定的評価への恐れは受療行動を阻害することが知られており、高 BDC 群においても同様の問題が生じる可能性がある。しかしながら、これまでに BDC に関連する対人的・社会的要因の検討はほとんど見られなかった。

Park (2007) はそれまでの拒絶過敏性の概念を拡大し、容姿に起因する拒絶過敏性 (Appearance-based Rejection Sensitivity; ARS）という概念を新たに提唱している。海外では ARS と BDC の関連についても検討が行われているが（Calogero et al., 2010）、研究対象が大学生に限られている等の問題がある。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では生涯発達的な視点を踏まえながら、3 つの研究課題を設定した。

(1) ARS 評価法の確立

Park et al. (2009) による短縮版 ARS scale の日本語版 (the Japanese short version of Appearance-based Rejection Sensitivity scale; J-ARS scale) を開発し、その心理測定学的特徴について検討を行う。

(2) ARS とデモグラフィックデータの関連についての生涯発達的検討

性差や発達段階（年代）間での ARS の差異について検討を行う。

(3) ARS と BDC の関連についての生涯発達的検討

関連症状（身体不満足感、やせ願望、過食、他者からの否定的評価への恐れ、抑うつ、強迫症状、拒絶過敏性）を統制した上で、ARS と BDC の関連について検討を行った。

３．研究の方法

(1) ARS 評価法の確立

J-ARS scale の作成に際し、尺度の開発者である Park 博士の許可を得た。まず、筆者を含む 2 名の臨床心理学者によって短縮版 ARS scale は日本語に翻訳された。日本語訳された短縮版 ARS scale の表現は専門の翻訳業者により、英語に逆翻訳された。逆翻訳の表現内容については Park 博士に確認を求めた。表現内容に関して指摘のあった箇所は日本語訳の修正を行い、再度、Park 博士に逆翻訳の確認を求めた。この過程を繰り返し、Park 博士の承諾の得られた日本語訳を暫定版 J-ARS scale とした。

【調査対象と調査方法】

2013 年の 12 月にインターネット調査会社マクロミルを通じ、全国 web 調査を実施した。調査対象は同社に登録されたリサーチ専用モニタ約 110 万名（調査時点）であり、インターネット画面上で調査の趣旨に同意した 520 名が調査に参加した。なお、男女比および各年代（20 代から 60 代）の調査協力者数が同数になるように統制を行った。調査協力者の平均年齢は男性 45 歳（SD = 14）、女性 44 歳（SD = 14）であった。調査時には同一回答者が複数回解答することのないよう、回答制限を設定した。

【調査項目】

性別、年齢、J-ARS scale 暫定版および日本語版自己価値の随伴性尺度の外見的魅力因子（内田, 2008)、日本語版自尊感情尺度 (Mimura & Griffith, 2007）、IPSM 日本語版（桑原ら, 1999）、日本語版 HSCL の拒絶過敏性因子（Nakano & Kitamura, 2001）、RQ 日本語版（加藤, 1998）、神経症傾向（並川ら, 2012）について回答を求めた。また、自分の外見の魅力の高さに関しても 7 段階 (1-7) で評定を求めた。

(2) ARS とデモグラフィックデータの関連についての生涯発達的検討

調査対象および調査方法は(1) ARS 評価法の確立と同様である。同調査で得られた J-ARS scale に基づく ARS 得点について、男女間や世代間での際の検証を行った。

(3) ARS と BDC の関連についての生涯発達的検討

【調査対象と調査方法】

2015 年 1 月にインターネット調査会社 (株式会社マクロミル）を通じ、web による全国調査を実施した。調査対象は同社に登録されたリサーチ専用モニタ約 120 万名（調査時点）であり、web 画面上で調査の趣旨に同意した者が回答を行った。調査協力者の男女比および年代構成（20 代～60 代）が同等になるように統制を行った。過去に発表者が同社を通じて行った研究目的の調査に参加した者は今回の調査対象から除外した。最終的に

520 名のモニタから回答を得た。調査に参加したモニタの平均年齢は男性 45 歳（SD = 14）、女性 44 歳（SD = 14）であった。

【調査項目】

調査では性別、年齢、日本語版 Body Image Concern Inventory（J-BICI: Tanaka et al., 2015）、J-ARS scale への回答を求めた。また、身体醜形懸念の関連要因として、日本語版 EDI-91（Shimura et al., 2003）の下位因子である身体不満足感、やせ願望および過食、SFNE（笹川ら, 2004）、 CES-D（島ら, 1985）、 OCI 日本語版（Ishikawa et al., 2014）、IPSM（桑原ら, 1999）への回答を求めた。

４．研究成果

(1) ARS 評価法の確立

探索的因子分析（主因子法・直接オブリミン回転）の結果、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性より、J-ARS scale は原版同様、全 10 項目で構成される単一因子構造である可能性が示唆された。確証的因子分析（修正指標に基づき誤差相関を設定）の結果もこの結果を支持するものであった。

この単一因子に関して、第 1 回目の調査データを分析し Cronbach の α 係数を算出したところ、α = .94 と高い値を示した。更に、再検査信頼性を検討するために第 1 回および第 2 回調査における ARS 得点の相関を算出したところ、r = .63（p < .001）と十分な値が得られた。

次に、J-ARS scale の構成概念妥当性を検討するために、ARS 得点とその他の指標との間で相関係数を算出した。

ARS 得点は自己価値の随伴性尺度の外見的魅力因子得点との間で中程度の正の相関（r = .44, p < .001）、自尊感情得点との間で中程度の負の相関（r = -.43, p < .001）、IPSM 日本語版の合計得点との間で中程度の正の相関（r = .51, p < .001）、日本語版 HSCL の拒絶過敏性因子得点との間で中程度の正の相関（r = .45, p < .001）を認めた。また、ARS 得点は RQ 日本語版で測定された愛着スタイルのうち、安定型と弱い負の相関（r = -.28, p < .001）、拒絶型と弱い負の相関（r = -.14, p < .01）、とらわれ型と弱い正の相関（r = .35, p < .001）、おそれ型と弱い正の相関（r = .23, p < .001）を示した。ARS 得点と神経症傾向との間では中程度の正の相関が確認された（r = .43, p < .001）。ARS 得点と外見の魅力についての自己評価は弱い負の相関を示した（r = -.35, p < .001）。

以上の結果より、J-ARS scale は心理測定学的に頑健な、ARS のアセスメントに有用なツールであることが示唆された。

(2) ARS とデモグラフィックデータの関連についての生涯発達的検討

J-ARS scale 作成時に得られたデータを基に、性（2）× 年代（5）の 2 要因分散分析を行った。分析の結果、性（$F_{(1, 510)}$ = 9.41, p < .01）と年代（$F_{(4, 510)}$ = 9.77, p < .001）の主効果が確認されたが、交互作用は認められなかった（$F_{(4, 510)}$ = 1.17, p = .32）。ARS は男性よりも女性において高い値を示していた。また、年代別に比較した際、ARS は 20 代で最も高い値を示し、加齢に伴い低下する傾向のあることが見出された。この結果は、身体醜形懸念が 20 代でピークの高さを示し、以後、加齢に伴い低下していくという Tanaka et al.（2012）の知見と同様の傾向を示すものであった。

(3) ARS と BDC の関連についての生涯発達的検討

身体醜形懸念を基準変数、ARS と性別、関連症状を説明変数とする階層的重回帰分析を実施した。性別に関してはダミー化処理を行った。Step1 では性別、関連症状の得点を投入し、Step2 では ARS 得点を投入した。

分析の結果、20 代では Step2 で ARS 得点を投入した際の決定係数の増加量は有意であった（R^2 = .55, ΔR^2 = .03, p <.05）。ARS は身体醜形懸念との間で正の関連を認めた（β = .20, p < .05）。また、性別（β = .21, p < .05）、強迫症状（β = .28, p < .01）、拒絶過敏性（β = .23, p < .05）が身体醜形懸念との間で有意な正の関連を認めた。身体不満足感（β = .08, p = .88）、やせ願望（β = -.04, p = .35）、過食（β = .25, p = .05）、社交不安症状（β = .12, p = .20）、抑うつ（β = -.10, p = .29）は身体醜形懸念とは有意な関連を認めなかった。30 代では、Step2 で ARS 得点を投入した際の決定係数の増加量は有意ではなかった（R^2 = .47, ΔR^2 = .01, p = .24）。40 代でも Step2 で ARS 得点を投入した際の決定係数の増加量は有意ではなかった（R^2 = .54, ΔR^2 = .01, p = .11）。50 代では Step2 で ARS 得点を投入した際の決定係数の増加量は有意であることが確認された（R^2 = .61, ΔR^2 = .08, p < .001）。ARS は身体醜形懸念との間で有意な正の関連を認めた（β = .39, p < .001）。また、強迫症状（β = .24, p < .01）が身体醜形懸念との間で有意な正の関連が示された。性別（β = .01, p = .91）、身体不満足感（β = .07, p = .83）、やせ願望（β = .15, p = .19）、過食（β = .06, p = .54）、社交不安症状 （β = .10, p = .28）、抑うつ （β = .03, p = .69）、拒絶過敏性 （β = .06, p = .51）と身体醜形懸念との間には有意な関連が認められなかった。60 代では Step2 で ARS 得点を投入した際の決定係数の増加量は有意であることが確認された（R^2 = .48, ΔR^2 = .03, p < .05）。ARS と身体醜形懸念との間に有意な正の関連のあることが示された（β = .39, p < .001）。更に、身体醜形懸念と強迫症状との間にも有意な正の関連のあることが確認された（β = .43, p < .001）。性別（β = .15, p

= .07）、身体不満足感（β = .04, p = .68）、やせ願望（β = .02, p = .86）、過食（β = -.08, p = .55）、社交不安症状 （β = .15, p = .15）、抑うつ （β = .14, p = .13）、拒絶過敏性 （β = -.01, p = .88）と身体醜形懸念との間には有意な関連は認められなかった。

以上の結果より、20 代、50 代、及び 60 代において、ARS が身体醜形懸念を独自に予測する可能性のあることが明らかとなった。このことから、ARS と身体醜形懸念との関連については、発達段階を考慮する必要があることが示唆される。また、30 代や 40 代といった中年期に差し掛かる時期において、ARS と身体醜形懸念との間に関連が見られなかった。今後は、その背景要因に関して検討が必要であろう。今回は web-based の横断研究デザインを用いたが、今後はサンプリング方法の再検討や縦断研究の導入も考慮し、更なる検証が必要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

（1） 田中勝則 醜形懸念の評価方法の確立および青年期における醜形懸念の特徴、九州大学博士論文、1-157、2015、査読有

（2） Tanaka M., Tayama J., Arimura T. Factor structure of the Body Image Concern Inventory in a Japanese sample, Body Image, 13, 18-21, 2015, 査読有

（3） 田中勝則、田山淳 高い身体醜形懸念を有する大学生の対人的な認知の特徴、カウンセリング研究、46、189-196、2013、査読有

（4） 田中勝則、田山淳 確証的因子分析による日本語版 Body Image Concern Inventory の因子構造の検討、カウンセリング研究、46、11-17、2013、査読有

（5） 田中勝則、田山淳、有村達之 大学生における身体醜形懸念とアレキシサイミアとの関連、心身医学、53、334-342、2013、査読有

〔学会発表〕（計 11 件）

（1） Tanaka M., Tayama J., Arimura T. Association between appearance-based rejection sensitivity and body disorder symptoms in Japanese university students. The 16th International ESCAP Congress, Madrid, Spain, 2015.

（2） Tanaka M., Tayama J., Arimura T. Appearance-based rejection sensitivity in Japanese women across the life-span. The 6th World Congress on Women's Mental Health, Tokyo, Japan, 2015.

（3） 田中勝則 容姿に起因する拒絶過敏性と身体醜形懸念の関連、日本心理学会第 79 回大会発表論文集、319、愛知（名古屋大学）、2015.

（4） Tanaka M., Tayama J., Shinkawa H., Tomiie T. Cognitive and behavioral characteristics associated with obesity in Japanese population. The 13th International Congress of Behavioral Medicine, Groningen, Netherlands, 2014.

（5） 田中勝則、塩谷亨、平井美佳、鋤柄増根 インターネットを利用した質問紙によるアセスメントの可能性と問題点、日本心理学会第 78 回大会発表論文集、SS(3)、京都（同志社大学）、2014.

（6） 田中勝則 日本語短縮版 Appearance-based Rejection Sensitivity scale の妥当性、日本心理学会第 78 回大会発表論文集、317、京都（同志社大学）、2014.

（7） 田中勝則、田山淳 日本語短縮版 Appearance-based Rejection Sensitivity scale の因子構造と信頼性、日本カウンセリング学会第 47 回大会発表論文集、141、愛知（名古屋大学）、2014.

（8） Tanaka M., Tayama J. Sociocultural factors associated with body dysmorphic concern in Japanese population. The 22th International Congress of Psychosomatic Medicine, Lisbon, Portugal, 2013.

（9） 田中勝則 身体醜形懸念と Cloninger の気質・性格モデルの関連、日本心理学会第 77 回大会発表論文集、402、北海道（札幌コンベンションセンター）、2013.

（10） 田中勝則、田山淳 ボディイメージの歪みに影響を及ぼす社会文化的態度と身体醜形懸念の関連についての生涯発達的検討、日本カウンセリング学会第 46 回大会発表論文集、147、埼玉（東京電機大学）、2013.

（11） 田中勝則、田山淳 ボディイメージや食行動異常に影響する社会文化的要因-性差と年代差に着目して-、第 19 回日本行動医学会学術総会抄録集、98、東京（東邦大学）、2013.

〔その他〕

ホームページ等

ReaD&Researchmap
http://researchmap.jp/tnk

６．研究組織

⑴研究代表者

田中　勝則（TANAKA MASANORI）

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：10510969

⑵研究分担者

なし

⑶連携研究者

なし